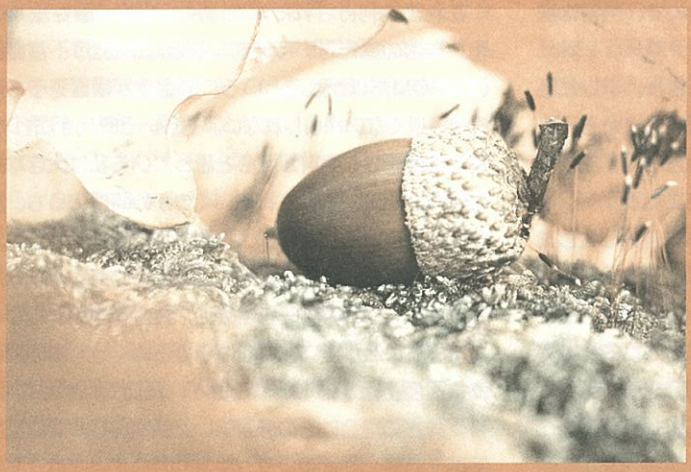
# 図書館だより

北海学園大学附属図書館報　第25巻3号(通巻167号)　2003.10.10

vol.25 NO.3

Bulletin of the Hokkai-Gakuen University Library

2 追塩千尋
「書物」の無くなる時



3 西應浩司
不測の空間

4 前田輪音
身近にある「本」が誘う世界—高校教科書がもたらしたもの

5 浦野　研
『コーヒーショップ』

6 伊藤淑子
学生のための不勉強の手引き

7 大学図書館相互利用サービスのご案内
図書館利用のポイント

8 香田雄介
FEEL THE DRAGON
編集後記

# 「書物」の無くなる時

文＝追塩千尋（おいしお　ちひろ／人文学部教授）

図書館だよりの文章としては穏やかではないが、「華氏451」という映画があった。ブラッドベリの原作（1953年）を1966年に映画化したもので、内容は次のようなものである。

近未来の社会では文字の使用が禁止され、テレビと絵・写真だけからなる新聞で情報の伝達がなされる。当然ながら読書や本の所有は処罰の対象になる。本をこっそり避難させていても密告などによりそのことが判明すると、消防隊ならぬ焚書隊が駆けつけ本を焼却してしまう。主人公である焚書隊員は実は愛書家であり、任務の度に気に入った本を密かに持ち帰っていた。そのことが発覚し、彼は愛読家が集まる森に追放になる。その森では一人一人が作品を決め暗記し、希望者に語っていた。死に直面した父が息子に、自分の暗記している作品を伝えているところで映画は終わる。

権力による焚書の未来版ともいうべき作品で、中々興味深かった。ちなみに、タイトルの「華氏451」は紙の発火温度とのことである。パソコンが今日ほど普及・発達していたなら、こうしたテーマは当時どのような展開をみせただろうか、ということにも思いが巡った。将来こうした形で書物が無くなることはないだろうが、少々気になることがある。それはこれまで出版された書物ではなく、これから出版される「書物」のことである。紙に印刷された書物ばかりではなく、電子画面に写し出して読む（あるいは見る）書物が増加してきていることである。マイクロフィルムはそうしたものの先駆とも言えるが、ここ10年ほどで電子辞書の普及とCD-ROM化された書物が目だってきている。書物は場所をとるので、こうした傾向は進むものと思う。

これまで刊行された書物は別として（酸性紙本の劣化・自壊の進行という深刻な問題はあるが）、書棚にはCD-ROMだけが並ぶという、愛書家が嘆きそうな時代はそう遠くないかもしれない。そういう時代が訪れても、本は体裁よりも中身が肝心と思っている私は大きな抵抗は無い。ただ、危惧されるいくつかの問題のうち、紙数の都合で2つほど指摘しておきたい。。

一つは画面で見ることのもどかしさである。紙に印刷されたものは斜目読みも含めて、頁全体を眺めながら読んでいることが多い。頁をぱらぱらめくって本の内容をある程度把握するということが、画面ではやりにくい。特に辞書の場合はその感が強い。長文のワープロ文書を添削する際、画面上とプリントしたものとではどちらが効果的かつ効率がよいかを思い返していただければよい。

二つ目は私の専門分野（日本史）に関わることだが、史料のCD-ROM化が進んでいることである。本文入力を行っているものは、索引を兼ねることになるので誠に重宝である。索引は該当項目の有無がすぐ判明するという長所と共に、そこしか見ないという短所を伴う。便利さは「索引論文」「統計処理的論文」と言われかねない底の浅い論文の増加にもつながりかねない。

書物が無くなることはないであろうが、CD化された書物が主流になった場合、それを利用する人間の思考力に悪影響を及ぼしかねない危惧を感じる。それは実質書物の無くなる時といえるのかもしれない。

# 不測の空間

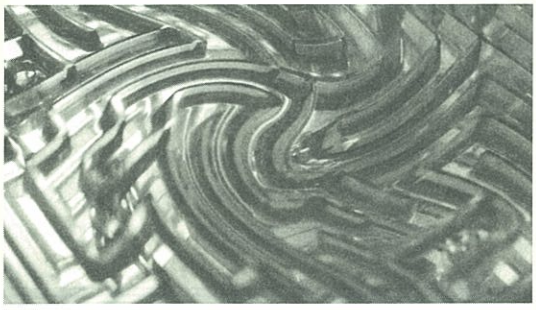
文＝西應浩司
（にしお　こうじ／工学部助教授）

私の都市・建築への興味は、神話にあらわれるダイダロスの造ったミノタウロスのラビュリントス、ピラネージの牢獄などを想像する楽しみと無縁ではなかったように思う。不思議なことに、これら未知の空間は私のイメージの中で図書館と結びついている。現実の図書館には書物の整理・運搬・閲覧などにおける極めて高い機能が要求される。しかし、そればかりではなく図書館には古くから、全く別のイメージがつきまとっているのも確かなようだ。アレクサンドリアの図書館、ボルヘスの小説に登場するバベルの図書館、映画「ハメット」に登場するガラスの図書館。……これらの「滅びた」あるいは「架空」の魅惑的な空間は全て迷宮と考えてよいだろう。知識の探索行動をささえる空間が迷宮に結び付くという矛盾はなぜ生じるのだろうか？　有用性に対するこうした裏切りともいえる夢想には、中世錬金術から継承された共通の悦楽があるのかもしれない。

そういったことを考えながら、ある日、江戸川乱歩邸に存在する土蔵の図書館内部の写真を眺めていた。ほの暗いユートピアには氏自身が設計した本棚が並び、探偵・推理小説のみならず、古今東西の文芸書から心理学・民族学の書物まで多岐にわたる蔵書が整然と置かれている。この空間を詳細に検分してゆくと、集積された知識に張り巡らされた見えない回路が現れては消える。しばし異様な厳密さで調整された精密機械にも似た幻視作家の脳の中をみているような感覚に襲われた。

確かに、知識（書物）というものは、思想の標本あるいは結晶であり、如何に分類・整理したとしても多くなれば複雑さを増し、集合体はカオスに近づく。だが、それは逆に組み合わせ次第で無限の創造性を生むものと成りえるのだ。そう考えてみれば、図書館は脳のメタファーであり、図書館の空間を設計するということはその回路を設計するということになるのであろうか。では、回路のパターンはどうなるのだろう。歩く人間にとって迷路となるパターンとは同心円なのか？　格子状なのか？　不規則に曲がっているのか？　整然とした格子状街路パターンと不規則に曲がったパターンを比較すると、やはり後者が難しいのではないかと考えてしまう。しかし、私が都市のパターンの研究としてこれら、2つを歩いて比較する実験を行ってみると面白いことがわかった。一度歩けば、不規則に曲がったパターンの方が格子状街路パターンよりも到達人数が多く、わかりやすかった。つまり、空間は実際に歩いてみないと、そのわかりやすさを知ることは難しいのである。これまでパターンは上から見た複雑さで判断されてきた傾向があるが、移動する人間の視点で考えると少し違った概念のようなものが見えてくる。だが、これはあくまで書物という物体を扱う場合なのだ。ここで近未来、図書館が扱うものが変化してくることを想定するとどうだろうか。レム・コールハース氏のフランス国立図書館設計コンペ案は、透明なガラスの立方体に図書館の機能を浮かべたような、建物の外形・重力から開放された情報の液体が満ちた空間だった。案はこれから、扱うものがAVなど形の無いDATAに移行すると、空間も溶けるということを表現しているようだ。これは、新しい迷宮のパターンを示唆しているように見えた。

究極の図書館がマルローの空想美術館を目指すとすれば、扱うものは純粋にDATAとなり、ますます脳が扱うものに近くなる。検索・閲覧は完全にディスプレイ上で行われ、DATAと人間との距離は限りなく消失するだろう。そうなると、回路の概念は一変し、図書館もかなり意外な形態となる可能性は十分ありそうだ。……不測の空間・「迷宮」への想像は拡がってゆくばかりである。



# 身近にある「本」が誘う世界

## 高校教科書がもたらしたもの

文＝前田輪音
（まえだ　りんね／法学部助教授）

小学校から高校を通じて、いつもそばにあった本の筆頭は教科書である。私は本が比較的好きだった。しかし、教科書を心底面白いと感じた記憶も、魅力的な情報の集まりだと思ったことも、残念ながら無い。特に社会科関係の教科書は、私を社会科嫌いにさせる根源的存在だった。

さて、高校の政治・経済の教科書では、日本国憲法の基本原則のひとつである戦争放棄や平和主義の記述箇所で、その内容の解説とともに、自衛隊の存在と関連する判例として、違憲判決をだした長沼ナイキ基地訴訟の第一審判決（1973年札幌地裁）が、紹介されていることがある。

初めて教科書でこの裁判を知ったのは高校生の時だった。大学1年時の「日本国憲法」の時間に再び登場した。その後、教育学部に進学して教授学を学び、数学教育の内容と方法について研究を進め、さらなる研究課題を模索していた時、みたびこの裁判が目にとまった。

1968年、防衛庁は地対空ミサイル基地を長沼町に建設するという「公益上の理由」により、馬追山の水源涵養保安林指定を解除するよう申請した。その馬追山はふもとにある長沼の水田にとって欠くべからざる山だった。基地建設のためにその山から大量の林を伐採することは、農民の農業を営む権利を著しく侵害するものであった。そこで、長沼住民は、憲法違反の自衛隊のために保安林の指定を解除するのは、「公益上の理由」に当たらない、と訴えた。これが長沼裁判の起こりである。

この訴えに共鳴し、多くの弁護士が手弁当で全国から集まり、自衛隊の実態調査に多くの憲法学者と北海道平和委員会などの市民組織が協力した。長沼の農業を手伝いに遠くから足を運んだ多くの若者達や、公判のたびに傍聴券を確保するため多くの市民が列をなした。公判の前の晩から裁判所前でテントをはり、中で学習会を積み重ねた。裁判長に政治的圧力が加えられた時、全国から電話や手紙などの励ましの声が寄せられた。これらの末の判決なのである。それは、教科書に書いてあった「自衛隊の違憲判決」という言葉のみからは想像できない、生活を守るための一致団結した一人一人の人間の行動である。長沼裁判をめぐる人々の行動は、人間が普通に生きることへの切なる願いのあらわれなのである。

さて、高校までの社会科関係の教科書の多くは、断片的な事実や制度の羅列であり、本来は人間社会の営みの諸側面を扱っているはずなのに、どこか人々の生活からかけ離れた記述となってしまっている。だから、教科書は面白くないのである。

しかし、断片的であれ、そんな教科書でも、たった一つの事実の記述の重みは、その事実の重みゆえ、後々の元高校生や元中学生の記憶に残る。大学の講義や他の何かの場面で目の前に現れる場合もある。そんな機会をさりげなくとらえ調べてみると、その先に予想だにしない世界が待ち構えているかもしれない。

今年2003年は長沼一審判決から30年目の年である。先日、その記念集会が開かれ、憲法を、長沼の農民を守り支えた多くの人々が集まった。そこで聞いた生の声は、教科書では知りえないひとつのドラマであった。しかしまた、教科書が無ければ出会えなかったかもしれないドラマである。面白くない教科書であっても、事実を知り、あらたな世界を知るきっかけとして、その「もたらしたもの」は意外にも大きい。

# コーヒーショップ

文＝浦野　研
（うらの　けん／経営学部講師）

ホノルルには、数多くのコーヒーショップがあります。もっとも、個人経営の小さな、そしてのんびりとしたショップの多くは、大規模チェーン店のあおりを受けて、ここ数年の間に次々と店をたたんでしまいました。ワイキキのパークショア・ホテル内にあったコーヒーショップなど、自分が時々足を運んだショップがなくなってしまったのは残念でしたが、広い意味の「カフェ」まで含めれば大半のリゾートホテルには洒落たコーヒーショップがあるので、あまり贅沢は言えません。

この2月に帰国するまでのおよそ5年半の間、僕は大学院生としてホノルルで暮らしていました。大学で非常勤講師もしていたのでキャンパス内に研究室があったのですが、研究のために本や論文を読むとき、僕は大抵コーヒーショップに自分の居場所を求めました。読まなければならない書物が山積みだったので、僕のコーヒーショップ通いは週に2度、3度と続きました。海辺のカフェで波の音を聞きながら読書をするなんて、そのころの僕には金銭的にそんな余裕がなかったので、実際に足を運んだのは当時ホノルル市内に本格的に進出してきたスターバックスでした。最初のころはマノア・マーケットプレイス近くにできたショップを利用していましたが、大学に近いために僕と同じ事を考える学生が多く、次第に自分の席を確保できなくなりました。あちこちさまよい歩いた結果、それほど混みあっていないショップをワイキキのクヒオ通り沿いに見つけ、そこをよく利用するようになりました。

店舗数が多いからなのか、ワイキキのスターバックスが札幌のそれのような大混雑になることはまずありません。カウンターで1杯＄1.60のエスプレッソを注文し、店内で飲む旨を告げて陶器のカップにサーブしてもらいます。それを手に席に着き、そこで2時間、ときには3時間を過ごします。本や論文を読むのが中心のときはソファに深く腰掛けて、研究の構想を練るためにメモを取る必要があるときや、ノートパソコンを持ち込んで原稿を書くときには、テーブルのある席を確保しました。

ワイキキのスターバックスには観光客も多くやってきますが、僕と同じようにゆっくり腰を落ち着けている客の多くはやはり地元の人。学生風の若者もちらほら見かけるし、既に第一線を退いて悠々自適な老後を過ごしているように見受けられるお年寄りが、ラテやカプチーノを片手に新聞を読みながらのんびり昼下がりを過ごすのもよく目にしました。

人が集い自由に語らうコーヒーショップの空間は、論文を読んだり書いたりするための集中力を削いでしまいそうな気もするのですが、誰もいない研究室や、冷房の低いノイズしか聞こえない図書館にいるよりもかえって集中できるのが不思議です。スピーカーから流れるBGMも、一度集中すると耳に入らなくなります。ときおり休憩しているときに、隣のテーブルから聞こえてくる話し声もいい気分転換になります。

僕のコーヒーショップ通いは帰国後も続き、今でも時々本や論文、ときにはノートパソコンを持って街のコーヒーショップに出かけます。もっとも、札幌のスターバックスは混雑しすぎているので、もう少しゆっくりできるショップを2、3軒見つけて、半ばローテーションを組むような形で回っています。

思えば、ここ1、2年に書いた論文や学会発表の資料の大半は、コーヒーショップで作成したものです。論文や発表資料には、研究に協力してくれた人たちに謝辞を述べるスペースを取りますが、テーブルいっぱいに論文を広げて頭を抱える僕を見ても、いやな顔ひとつせず応対してくれるコーヒーショップの店員さんにも、感謝の意を表すべきかもしれません。

# 学生のための
# 不勉強の手引き

文＝伊藤淑子
（いとう　よしこ／経済学部教授）

図書館だよりの編集担当の方から、「『学生のための勉強の手引き』のようなテーマで、原稿を書いてくれませんか。」と依頼をいただいた。びっくりして思わず「ハイ」と言ってしまったものの、いざとなるとすっかりと頭をかかえてしまった。どう考えても、私が「勉強の手引き」を書くのは筋違いである。自慢になるようなことではないので、いつもは言葉に出さないようにしているのだが、「したくない勉強はしない」というのが、私が密かに大切にしているルールである。私が書けるとしたら、「学生のための不勉強の手引き」だけだ。というわけで、勝手ながらテーマを変更させていただくことにした。

とはいっても、ただ単に不勉強なのはよいことだ、などと主張したいのではない。「したくない勉強はしない」ということは裏を返せば、「したい勉強はしよう」ということでもある。さらにいえば、自分が何を勉強したくて何をしたくないのかを、少なくとも自分の中では、はっきりさせておこうじゃないかということになる。

ここで勉強というのは、教室の中で講義を聴くことだけを意味していない。

去年のゼミに、印象に残る学生がいた。若者の活字離れが指摘されて久しいこの時代に、いつも部屋にこもって濫読しているという。「最近は五木寛之を読んでいる」と聞いた時には、「へえ、昔はあんたみたいな人は野坂昭如を読んだもんだけどね」とつぶやいてしまった。彼はきょとんとしていた。

それはさておき、彼が書いてくる文章は、なかなか読ませるものがあった。文章がすべて自分の言葉で綴ってあったからだ。ぽりぽりと頭をかきながらふと発する質問など、実に本質をついていた。そんな彼が、今年の3月、教員の研究室をまわって歩いていた。卒業するには単位が不足していることに、突然気づいたのだ。どうも、それまで数え間違いをしていたらしい。足を運んで頼んでも、それですむほど世の中は甘くない。結局彼は、大学で5年間を過ごすことになった。結果的には卒業に5年かかることになったが、それでも彼は必要なことをきちんと学んでいると、私は思う。

立花隆の「青春漂流」（講談社文庫）という本がある。著者が1年かけて行った、11人の若者とのインタビューの記録だ。若者の職業はナイフ職人、精肉職人、動物カメラマンなど様々だ。共通しているのは、彼らがその領域では全国的に、ある者は世界的に評価されている人々だということである。もう1つの共通点は、11人の全員が、かつて落ちこぼれであったということだ。

立花によると落ちこぼれた理由は「一言で乱暴に総括してしまえば、面白くなかったから」だそうだ。しかし、一見おちこぼれとして過ごしたその時期は、若者たちにとって必要な時期でもあった。その時期について立花は「落ちこぼれつつ、自分の情熱をかける対象を追い求めていたのである。そして、それをいった発見するや、彼らは落ちこぼれ人間から、とてつもない努力家に変身する」と、説明する。そして、落ちこぼれとみえるその時期に最も大切なのは、「何ものかを求めんとする意志」であると、しめくくっている。

この話は実は、「不勉強の手引き」と通じている。したくない勉強は、最小限にとどめた方がよい。勉強そのものが嫌いになってしまうからだ。しかし一方で、「何かを求めんとする意志」を持ち続けること。一言でいうと、それが「学生のための不勉強の手引き」なのだと、私は思っている。

# 大学図書館相互利用サービスのご案内

利用しよう！ 大学図書館相互利用サービス

このサービスは北海道内の大学図書館が相互に協力して、教育・研究活動の発展に貢献することを目指すものです。それぞれの加盟館ごとに学外者の利用登録を行なう必要はありますが、図書館間の相互貸借によらず、学生証・身分証明書等の提示だけで他大学学生・教職員に直接閲覧、複写、貸出のサービスを実施しています。

**[サービスの内容]　閲覧、複写及び貸出**

利用の詳細は受入館の利用規則によります。なお、受入館の利用規則、指示に違反した場合は図書館の利用が禁止されることがあります。

**[利用方法]**

- このサービスに参加する大学に所属する学部学生（短大生を含む）、大学院生並びに専任教職員は、各大学の発行する学生証、身分証明証またはそれに代わる紹介状を提示して参加大学の図書館を相互に利用することができます。
- 参加大学の図書館を利用するためには、利用館ごとに図書館利用登録が必要です。受入館のカウンターに申し出て所定の手続き（学外者利用申請、学生証の提示等）を行なうことで初めて閲覧、複写及び貸出サービスを利用することができます。
- 利用にあたっては、あらかじめ受入館の開館スケジュール、資料の所蔵状況等を確認してから利用してください。自家用車の構内駐車はできませんので、公共交通機関を利用しましょう。
- 他大学の図書を借用する場合は、貸出期間を守り丁寧に利用し、借用者が貸し出しを受けた図書館に直接返します。なお、宅配便での返送を認めます。
- 備品及び図書館資料を汚損または忘失した時は利用者が弁償の責を負います。なお、所属館にも事故発生（長期延滞、汚損または忘失）を連絡、協力して問題の解決にあたるものと致します。

**[加盟館]**

旭川大学図書館、札幌大学図書館、札幌医科大学附属図書館、札幌学院大学図書館、藤女子大学図書館、北星学園大学図書館、北海学園大学附属図書館、北海道浅井学園大学図書館、北海道医療大学総合図書館、北海道工業大学図書館、酪農学園大学附属図書館

（2003年4月1日現在）

# 図書館利用のポイント

※　図書は、日本十進分類法（NDC）によって同じテーマ・形式のものが集まるように分類され、書架上では、分類記号が同じものは著者記号順（著者が複数のもの、編者のみのものなどは書名順）に、また、全集・シリーズなどは分冊番号順に並べられています。以下を参照してください。

**日本十進分類法（NDC）綱目表（2次区分表）**

000 総　記
010 図書館
020 図書・書誌学
030 百科事典
040 一般論文・講演集
050 逐次刊行物・年鑑
060 学会・団体・研究調査機関
070 ジャーナリズム・新聞
080 叢書・全集
090 貴重書・郷土資料

100 哲　学
110 哲学各論
120 東洋思想
130 西洋哲学
140 心理学
150 倫理学
160 宗教
170 神道
180 仏教
190 キリスト教

200 歴　史
210 日本史
220 アジア史・東洋史
230 ヨーロッパ史・西洋史
240 アフリカ史
250 北アメリカ史
260 南アメリカ史
270 オセアニア史
280 伝記
290 地理・地誌・紀行

300 社会科学
310 政治
320 法律
330 経済
340 財政
350 統計
360 社会
370 教育
380 風俗習慣・民俗学
390 国防・軍事

400 自然科学
410 数学
420 物理学
430 化学
440 天文学・宇宙科学
450 地球科学・地学・地質学
460 生物科学・一般生物学
470 植物学
480 動物学
490 医学・薬学

500 技術・工学・工業
510 建設工学・土木工学
520 建築学
530 機械工学・原子力工学
540 電気工学・電子工学
550 海洋工学・船舶工学・兵器
560 金属工学・鉱山工学
570 化学工業
580 製造工業
590 家政学・生活科学

600 産　業
610 農業
620 園芸・造園
630 蚕糸業
640 畜産業・獣医学
650 林業
660 水産業
670 商業
680 運輸・交通
690 通信事業

700 芸　術
710 彫刻
720 絵画・書道
730 版画
740 写真・印刷
750 工芸
760 音楽・舞踊
770 演劇・映画
780 スポーツ・体育
790 諸芸・娯楽

800 言　語
810 日本語
820 中国語・東洋の諸言語
830 英語
840 ドイツ語
850 フランス語
860 スペイン語
870 イタリア語
880 ロシア語
890 その他の諸言語

900 文　学
910 日本文学
920 中国文学・東洋文学
930 英米文学
940 ドイツ文学
950 フランス文学
960 スペイン文学
970 イタリア文学
980 ロシア文学
990 その他の諸文学

# FEEL THE DRAGON

文＝香田雄介
（こうだゆうすけ／大学院文学研究科　英米文化専攻修士課程１年）

学部生時代、僕は少林寺拳法部に所属しており、今でも練習に参加させてもらっている。高校時代に空手道部に所属し、卒業後も何か武道をやっていたいと思い、少林寺拳法部に入部したのである。

なぜ、自分は武道を続けているのかというと、まず他のスポーツがほとんどダメなのである。球技なんぞやらせたら僕の左（右ではない）に出るものはいないぐらいの凄腕なのである。だが身体を動かすことそのものは好きで、体育でも陸上やマット運動などは中々好成績だった。また、プロレス好きが長じて格闘技が好きになったというのもある。

だがしかし、僕を武の道に入らせた最大の理由……それはカンフー映画界の伝説、ジークンドーの創始者、鉄拳振るうドラゴン……そう、ブルース・リーなのである。いや、呼び捨てなど恐れ多い、ここはリー師父とお呼びしよう。

リー師父との出会いは鮮烈だった。夜、何気なくテレビをつけると、そこには上半身裸で奇声を上げて敵を叩きのめす男がいた。コレは一体！？　そう思い新聞に目をやると、そこにはこう書かれてあった―「○×ロードショー　燃えよドラゴン」―と。

これがあのブルース・リーか！　当時その名前しか知らなかった僕は驚愕した。中学3年、多感盛りのお年頃。影響を受けるなというのがムリではないか。これが、武道の道に入ることを心に決めた瞬間だった。

それからは例によって例のごとく、リー師父を目指してアホな努力をしたものである。実際の使用頻度など無いに等しい飛び蹴りを練習したり、怪鳥音の発声練習をしたり、指についた血をペロリと舐めて「プッ！」と吐き出したり……等々。

無論、今では映画と実戦の違いはしっかり分かっているし、映画の中でのリー師父の動きも「映画用」の動きであろうことは分かっている。しかし、自分の中での武道のシンボルは未だにリー師父であり、それは半ば絶対的な心の誓いと言ってもいいものである。

なぜ、未だにリー師父を崇拝するのか。師父が実際にも優れた武術家であり、独自の武術体系を築いた人物であることもその理由の一つである。しかし、最も大きな理由は、リー師父を見るたびにこの胸の内にこみ上げる、この熱い感情である。なんじゃそりゃ、と言われるかもしれないが、だって実際そうなんだから仕方ないのである。

滾るのである。男、いや「漢（おとこ）」として心の内に滾る何かが、今でも僕に拳を振るわせるのである。その感情を、言葉にすることは出来ない。いや、言葉にしてはならない。それはまさに、「考えるな！　感じるんだ。」という、あの伝説的名台詞そのものなのだから。

## 編集後記

先月、キタラで行われた日本フィルハーモニー交響楽団の定期演奏会に、私の敬愛するギタリスト・村治佳織がソリストとして参加しました。

透き通った流れの中に、ときとして情熱的な一面をうかがわせる彼女のギターは、私にいろいろなことを考える時間を与えてくれます。私はそのひとときの心地良さが気に入っています。やがて会場がカーテンコールに包まれるまで、私の幸せな時間は続くのです。

来年の夏、すでに予定されている彼女の札幌公演に、おそらくはまた足を運ぶでしょう。そこで私が何を考え、そこにどんな変化があるのか。ほんの少々、愉しみです。

北海学園大学附属図書館報　図書館だより 第25巻3号（通巻167号）
本館　〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号　工学部図書室　〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目1番1号
TEL (011) 841-1161（本館内線）2273・2274・2275（工学部内線）7813・7814　印刷所：(株) アイワード